

第2回：トマトの土壌病害克服のための接ぎ木技術の導入

シリーズの第一回目では、JICA 筑波における研修コースにおいて、それぞれの国や地域の問題を抱える研修員に対し、どのようなアプローチで日本の栽培技術を研修しているか、その基本的取り組みを紹介した。今回から数回にわたっては実際に研修で取り上げた日本の技術を紹介していく。今回は、2007年のフィリピンからの研修員が行った接ぎ木の導入事例を紹介する。

この研修員は市農業事務所に農業技術者として勤務し、野菜および果樹の栽培をおこなう農民に対し、地域環境にあった適正品種の導入、基本的な栽培方法、生物防除や農薬に替わる植物抽出物を使った環境保全型病虫害防除法の導入などの営農指導をおこなっている。研修員によると現地では農民が病害虫の対策に農薬を多用しているものの、その効果は低く収量も依然として低いという。特にトマトの生産においては、土壌病害の影響がひどく、青枯病への対策が急務であることがわかったため、その対策として(イ)輪作技術の導入(菌密度の低下)、(ロ)耐病性品種の導入、(ハ)窒素過多施用の施肥技術改善、(ニ)耐病性台木による接ぎ木(ホ)圃場の消毒などの日本の技術を紹介し、フィリピンにおける妥当性を研修員とともに検討した。その結果、接ぎ木技術がフィリピンの農民へ普及可能な有用技術と判断し、耐病性台木による接ぎ木を個別実験のテーマとし、具体的な効果の確認や普及における課題を探ることとした。

まず初めに現在日本において一般的に用いられている専用の接ぎ木クリップやチューブを使って実習をおこないトマトの接ぎ木技術を習得させた。その上で、専用資材が開発される以前に和紙や釣りの重しに使う薄い鉛板を接ぎ木の止め具として農家が工夫していたことも紹介し、専用資材が無いフィリピンでも工夫次第でうまく接ぎ木ができることを伝え、帰国後の普及の参考情報を与えた。接ぎ木のキーポイントとして、穂木・台木の大きさを揃えるように播種期を調整すること、苗からの蒸発が抑えられる日陰などの場所で手早くおこない、接ぎ木から3～4日間の保湿と温度管理および早い時期から光を加減して生育を促すこと等を十分に体験、理解してもらうことに力を注いだ。フィリピンで問題となっている土壌病害の回避に用いるナスとトマト台木の評価を目的とした播種、接ぎ木、そして菌の接種を通して、接ぎ木技術を習得させると共に病害回避の効果を確認させた。

実際にフィリピンで接ぎ木技術を普及していく上での課題としては、果実の品質や収量へ悪影響をおよぼす台木を避けること(穂木との親和性の課題)、好結果を得た台木ナスの入手先の確保、接ぎ木をすることによる経済面の負担の検討、接ぎ木作業及び順化の技術訓練手法の確立などがあげられる。こうしたことを考慮に入れつつ、研修員は展示を兼ねた現地における追試験の実施計画をアクションプランとして作成した。帰国後の現地適応を考えると、個別実験で採用した「チューブ接ぎ」手法と「呼接ぎ」手法との比較検討が必要と考えられ、このような技術についても、フォローアップ情報を提供していく予定である。



TBIC での接ぎ木実習



農家での接ぎ木見学



出来上がった接ぎ木苗